

自分を愛するように、

あなたの隣人を愛しなさい。

木戸 定

たとえ、キリストの復活が信じられなくても、心のなかにキリストが宿ってくださることは素敵だと思いませんか。

それも、キリストが心のなかに復活してくださったと考えてはどうでしょうか。

「こんな自分なんて生きていてもしょろがない」と、自己嫌悪に陥るのは、きっと私だけではないでしょう。何をやってもダメ！失敗ばかりしている自分、そんな自分が嫌で嫌でしよろがなくなる時があります。けれども、そんなダメな人間をキリストは愛されました。ダメな自分から理想とする自分になれるように、今の自分から出発できることを教えて下さいました。

そのことを思い出して、自己嫌悪に苛まれるとき、あるがままの自分を受容し、抱擁できるとき、それはまさにキリストが私たちの心をまぶねとし、宿ってくださったことにほかならないのではないのでしょうか。

昨年の12月から奉献の時に讚美歌21の256番6節を歌うようになりました。

愛する主イエスよ、今ささぐる
ひとつの願いを聞きたまえや。
この身と心を主のまぶねとし
とわに宿りたまえ。

人生のいかなる局面においても、主イエスが心のなかに宿ってくださるなら、それはどんな大きな生きる力になることでしょうか。

失意のどん底にあるとき、怒りで身体が震えるとき、怠惰な日々を過ごすとき、優越感にひたりきって他人を見下しているとき、イエス様なら何て思われるだろうか、そう考えて、イエス様の御心に立ち還ることができれば、きっとイエス様に救っていただいたという大きな喜びをいただくことになると思います。

お一人おひとりの心にキリストの復活が起こりますように！

教会学校からの思い出の数々

青木陽一郎

小学生の低学年の時期から、父に教会に連れて行かれ、クリスチャンの家庭で育った私は、生の中心、心の置きどころについて悩んだり、模索する場面が余りなかったように思います。すでにひかかれているレールの上を走る、もしくはすでに開かれている門をくぐる

というようなハードルが低い状態でキリスト教会に入りました。

ですから、聖書や説教等で神の愛に突き動かされたり、強い決断を経験して教会生活をされている方々には、その信仰を強さを感じ、羨望の念を抱きます。

よく感じますが、若い人たちから見習われるような信仰生活ではなく常に自問自答です。入り口が広がったためこれから積み重ねていく信仰となっていけばと思っています。

さて、社会人となって教会を遠ざかっていた時期がありました。35歳からは大阪を離れて15年間、関東・中国地区の担当で単身赴任と出張生活の毎日でした。毎月数字に追われていましたが、特に数字が苦しい担当の時は土日も頭の中は数字の計算しかありませんでした。教会から離れる言い訳となりますが実際心の余裕がなく、会社人間そのものでした。やっと大阪勤務に戻ることでとなったのは50歳近くになり近畿の担当となるからです。

久しぶりの島之内教会は知らない方が多くおられるようになって、やや復帰には力が要りましたが、中島牧師、大門牧師を始め皆さんの親切さがありがたかったです。離れていた間、一階のカナホール、シオンルーム等非常に美しくなり使いやすくなっていました。皆さんのご努力が形となって現れていました。半面、使用しなくなった部屋やスペースがあり、それらの箇所を見ると出会った多くの方々を思い出します。

島之内小劇場と並行して行っていた「コーヒーハウス」、カナホール前のスペースで毎週木曜日、車座に腰かけ20～30歳代が主な参加者で教会以外の方が多い交わりの場でした。コーヒーと同時にクッキー等を用意して頂いた西原明牧師夫妻、荒川伝道師夫妻（当時）。真剣な討論、楽しい語らいでした。

この頃一番影響を受けたのが矢張り西原明牧師です。お互い若い頃でしたから意見の相違で言い合いもありました。しかし、教えが上回っていました。

そして、もう一人とんでもない方と遭遇？する事となりました。4～5歳年上の方で確か九州から単身で南区に住み、冬でもランニング一枚で走りながらの新聞配達。風貌はイエス？にそっくりのひげづら！名前は大石崇高さん。ソフトボールの試合で、相手チームのプレーに「ナイスキャッチ！」と大声を（本気言ってるの？）。青年会会議の欠席理由が、九州からの無二の友人を迎えに行くのに「さぼるらせて」と言う。小劇場反対の人には「愛がない！」などと大石さんの言動は、私の価値観というか、考えのレベルが本質に達していないと知らされ頭の中が混乱しました。

薦められた書滝沢克己著「芥川龍之介の思想」にも新発見が多く心を打たれました。また、私の中では尊敬する方でしたので、無条件に「崇高」の名前を次男に頂きました。

教会から離れていた時期、仕事上多くの方々と会話をしたり、少し本を読んだりすると、自分が余りにも日本の中に根ざしている「仏教」に無知だと気付きました。日本の伝統や風習の多くが仏教から始まっていると言ってもよく、世間の常識が分かっていないようでした。

クリスチャンでも、寺院の庭や本堂に入ると何故か心が落ち着くのではないのでしょうか？もしくは神社仏閣には足を運ばないのでしょうか？

仏教用語の意味、宗派や仏像を知りたく本を読み始め、特に仏像の「美」に魅せられました。

「島之内教会だより」にこのような寄稿をされる方はおられないと思いますが、良ければいつかこの続きを書きたいと思います。

「終戦後頃の島之内教会～米本氏からの聞き書き～」

土橋 薫

この3月22日に愛染園100周年式典と講演会があり、元島之内教会会員の米本信篤氏にお会いしました。（現在はお住まいのある和歌山で教会生活を送っておられます。）別所兄や故青木姉と同時代の方で、現在92歳とのこと。なかなかお元気で、久しぶりに訪れた島之内教会の礼拝堂を眺めながら、昔を懐かしんでいろいろ貴重なお話を伺うことができました。旧くからの教会員の皆さまには、当然のようにご存知かもしれませんが、わたしにとっては珍しい話でしたので、ここにご紹介したいと思いました。

まず一つは、この礼拝堂前方の壁を見ると、ちょうど窓と同じアーチ型の窪みがあります。これはデザイン上のものかなとも思っていたのですが、やはりここには元々窓があったとのこと。（第二次世界大戦の）大阪空襲で、島之内教会も焼けて、かなりの損傷を受けたのを、当時の竹内牧師の元で復興されたのですが、その際昭和25年（1950年）に、その窓は塞いだそうです。その理由は、何と「講壇の所が明るくなり過ぎて重みが無い。」ということで、重厚な雰囲気醸し出すためであったようです。今となっては、教会の両横に高い建物が建ち、窓があっても明るすぎるといふことは無いかと思いますが。

もう一つは、終戦後に西原勇牧師が赴任されてまもなくの頃、今グランドピアノの置かれているあたりに、大きなオルガンがあったということです。それも、専用の送風機が奥の礼拝準備室に置かれ、そこから送風のための管が扉を開けた隙間から伸びていたとのこと。オルガンが弾かれていない時にも、「ブーン」というモーターの音が少し聞こえたそうです。それは果たしてパイプオルガンであったのかどうか、についてはお分かりでなかったのですが、かなり大きなオルガンであったとのこと。西原恵牧師夫人によると、「あれは置かせてあげている。」ということで、進駐軍の物だったのか？アメリカの人が来て弾いているのも見たそうです。「礼拝にも1～2度使ったような気もするが、何しろもう70年ばかりも前のことで、はっきり覚えていない。」とおっしゃいました。もちろんそれ以前から使っていたリードオルガン（足踏みオルガン）はあったそうです。その大き

なオルガンは、いつの間にか無くなり、引き取られたのか、あるいは（教会側から）お断りしたのか定かではないとのことでした。この話は祖母の故薄孝子からも聞いたことがなく、初めて聞いたので、そんなこともあったのかと大変興味深く伺いました。ひと昔前の話も、こうした機会に書き残しておかないと、忘れ去られていくのだなあと感じ、簡単ではありますが、まとめてみました。もし、他にも当時のお話を聞かせていただく機会があれば、ぜひ伺いしたいと思いました。

復活の主と歩く人生

「ここからは・・・あの方がお供なされます」

突然、背後で与蔵の引きしぼるような声が聞こえた。

遠藤周作「侍」より

黒田正純

復活祭の光は、生命の芽吹き、春の陽光をまきこんで輝き、その中にひとつの影のような主の姿を私は見ていたように思う。53年前の洗礼式の朝のことで、主に支えられて生きて、今を迎えている。遠藤周作さんの「沈黙」を読んだのは、その3年後で、それから50年後の今年1月、スコセッシ監督の映画「沈黙」を観た。映画の終わりにスタッフ、俳優名など長い英語表示が続いた。その英語を目で追おうとしたのだが、字が余りに多く、細かいのでなかなかにあきらめた。突然、日本語表示の短い文章で、この映画を、日本に生きておられる主イエス・キリストを信じる人達に捧げるとのテロップがながれた。この映画は、普通考えられるビジネスとしてのハリウッド映画でなく、作家遠藤周作へのオマージュ（尊敬）として作成され、この映画のために27年をかけた、スコセッシ監督のライフワークであったと、私は、気付かされた。

世界でも、日本の身近な生活の中でも、暴力が日常的な恐怖になっている。戦争は、この地上で今に至るも絶えることはない。主は武器を取られることはなかった。子供、女性、病で苦しんでいる人々、絶えずこの世界の繋がりから、つまはじきされている人達に寄り添って疲れることがなかった。権力者の腐敗と傲慢に怒りを示された。肩書きや地位でなく、主は、一人一人の人間の苦しみを受けとめられた。「あなたの敵を愛しなさい」は、私には不可能事だが、主は、十字架の死に至るまで、その言葉の通り生きられた。復活の主は、私にとって至高の愛と美であり、私にとって真の救い主である。

3年前だったか、梅田で「復活」という映画を観た。主と弟子達がいつも微笑みを絶

やすことのない集まりとして演出されていて、そうであったかもしれないと納得したことがあった。福音書の中に主と弟子たちが、断食をしない大食漢のグループとして人々から罵られたと書いてあるところがある。食事中に笑い合うこともあったかも知れない。福音書に書かれてはいないが、エマオ途上の二人の弟子達に、復活の主が現れ共にパンを食べ、去られた後、おそらくこの二人の弟子達には突き抜けるような喜びの叫びがあったと想像しても不思議ではない。そのほうが自然に思える。主の復活後の弟子達の動きが不思議に思われるくらい目を見張るものがあったのは、復活された主から赦された、愛されたという喜びが、弟子達の心の底にあったと私は思っている。主の十字架の前、ユダもペテロも他の逃げ去った弟子たちも同罪の、主を裏切った集団であった。自死しなければ、ユダも赦されたかもしれない。自死も自分に対する暴力、自らを愛するように、隣人を愛しなさいは主の大切な言葉、何があっても絶望してはいけないとのメッセージをここで受け取る。自死がなければ、最後の晩餐の場所から、ユダが飛び出したあとの「時は、夜であった」という福音書の記述はなかったかもしれない。

復活祭は、私には何にも代えがたい喜びの日で、支えられていることを静かな気持ちで受け取る一日である。私の心の奥に深く、主は、語り給うという、主の声を聴くようになった。私の人生で、どうあがいても苦しい状況でしかない時に絶望しなかったのは、復活祭の洗礼を経て、主の“復活”という真実が私の内に内在し、支えられたからだと思う

人生には「ヨブ記」のヨブのような不条理の苦しみから逃れられない時がある。文学を通して知る状況がある。遠藤周作さんの「侍」は、「沈黙」や「深い河」と並ぶ最高傑作の1冊と私は思っています。支倉常長をモデルとした文学で、文中の圧倒する緊張感に、私は一気に読んだ。遠藤周作の心の思いが、書かれた言葉に集中しているのが分かる。

伊達正宗が1613年、遣欧使節として、時のスペイン国王とローマ法王に、太平洋からメキシコ、大西洋からヨーロッパへの行程で送り、その大航海は、日本に帰るまで7年を要した。7年後、日本に帰国した時は、キリスト教は禁教となっていて、明治になってローマから知らされるまで、この遣欧使節は、日本の歴史から抹殺された。幕府の禁教令のてまえ、伊達藩も遣欧使節の代表であった主人公の「侍」を裁かざるを得なくなった。通訳として、また道案内として同道したスペイン人神父も禁教下の日本に再び潜入したが、捕らえられ処刑された。しかし、スペイン、ローマへの大航海の随員のうち、少なからざる人たちが、主イエス・キリストを信じるようになっていた。階級社会である武士のありかたと全く違った、主の愛が、彼らの心をとらえ始めていたのだ。岩を穿つように主の心が、届き始めたのだが、徳川幕府は、長崎、出島でオランダと通商する以外、外国からの動きを250年余り、閉ざしてしまった。個である人間に向き合おうとする主の教えを遠ざけた、鎖国を国是とした江戸時代は、何という時代であったのだろう。信長の時代には、神学、ラテン語、音楽を学ぶセミナリオができていた。

歴史に if はないが、そのまま国が開かれて切磋琢磨される時代を迎えていけばという思いがある。

裁きの座へ向かう侍である主人公に、長年、従者として仕え、ローマにも同道した与蔵の言葉が、巻頭の言葉である。私は、日本語の敬語で、これほど深く受けとめた言葉はなかった～読んで涙になった。

洗礼を受けたあとの、私の半生は、復活の主の真実を信じた人生であったと、この年になって思う。信じることで与えられる恵みである。信じる恵み～肉体的に物質的にも最も弱くなる老年に向かって、信じることを通して与えられる力、その恵みに信頼する老年であっていいと思っている。

私が天国へ召される時、一人で行くのは、いかにも辛く厳しいので、この与蔵の言葉を思い出すかも知れない。